慈済ものがたり

ツーチー　2021年9月　297





●扉の言葉　文・證厳法師　訳・済運　撮影・蕭耀華

瑞雲を呼んで疫病を終息させる

世紀の疫病が地球を覆っていますが、
敬虔に戒慎することが妙方なのです。
心を合わせて責任感を養い、
見返りを求めない奉仕で自他を利し、
瑞雲を呼んで疫病を終息させるのです。

目次

慈済日本サイト

【編集者の言葉】
人の世の至情　善耕／訳　4

【主題報道・台湾のコロナ禍　慈済の寄り添い】
防疫中の医療チーム・艋舺と西門町　明陞／訳　8
ステイホームでも さらに力強く支援　高嶋由紀子／訳　14
コロナ禍の台湾アラートと
慈済の寄り添いケア日誌　心嫈／訳　32
「ジンスー本草飲」は祝福されたお茶　葉美娥／訳　38

【特別報道】
永遠なる精舎の大師兄
僧衣を探したあの晩　慈願／訳　47

【證厳法師のお諭し】
人類に試練を与える重大教育　慈願／訳　56

【慈済の55年】
医療における慈善と慈善医療　本諦／訳　61
善が集まる地域拠点へ、ようこそ　御山凜／訳　66
心に響いた一言　荳荳／訳　71

【国際慈善】
日本における竹筒歳月　葉美娥／訳　76
今世も来世もジンバブエを守る　田中亜依／訳　86
義足が支えた人生　八百屋家族の幸せ　本諦／訳　92

【行脚の軌跡】
幸福感　済運／訳　100
七月の出来事　済運／訳　106

表紙



台北慈済病院は、５月から新型コロナの患者を受け入れる専用病室を順次、増設してきた。医療スタッフは長時間防護服などを身に付けて救命に努め、目まぐるしく変化するコロナ禍の中で、力を合わせてこの時期を乗り切っている。（撮影・蕭耀華）

人の世の至情

◎訳・善耕

五月中旬の新型コロナウイルスの感染状況が、ヨーロッパとアメリカでは落ち着いてきたが、アジアでは深刻さが増し始めた。ウイルスも変異し続け、拡散はさらに加速している。昨年は比較的平穏だった台湾も、ここに来て爆発的に感染が拡大し、全土にステージ３の警戒体制が敷かれ、患者の急増により、医療体制も一時的に逼迫した。

ある公衆衛生学の学者はインタビューに答えて、「コロナ疲れ」が人々の気を緩めさせる理由の一つとなっていると述べた。台湾の人々は、ここに来てコロナ禍が身に差し迫っている脅威を感じ、苛立ちが行動の自由を縮小し、人同士の交流空間を狭めている。

人の流れが複雑な万華（バンカ）区が、台北市で最初の感染ホットスポットとなった。現場で簡易検査を行っていた医療スタッフは、地域の一部の人が差別的な目で見られることを恐れていることに気付いた。如何にして人々に家から出て検査を受けてもらうかが、当時最大の試練になったのである。また、多くのホームレスに飲食の問題が発生したが、民衆が「防疫の落とし穴」だとして恐れたため、社会から見捨てられたようになってしまった。

幸いに、深刻なコロナ禍にあっても、温かい人情が見られた。熱心な地元の店舗やＮＧＯ、ソーシャルワーカーが生活と防疫のための物資を配付し、感染対策を宣伝したおかげで、ホームレスの九割以上がマスクを着用し、最低限必要な生活用品を持つことができた。

台北慈済病院の集中治療室主任である蘇文麟（スー・ウェンリン）医師は眠れない夜に、新型ウイルス肺炎の重症患者の家族がエクモ治療をしないこ

とを意思表示し、限られた医療資源をもっと必要としている人に使って欲しいと言ったことを思い出した。彼は深く感銘を覚え、翌日から仕事を続ける勇気をもらった。

「英雄視」される医療スタッフであっても、人々と同じように家族という絆で結ばれている。だからこそ病棟で生離死別という衝撃の場面に向き合った時、患者のためにもっと何かしてあげたいと思うのだが、いつも思い通りにいくとは限らない。例えば、患者が最期を迎える時に、家族が側に来てゆっくり別れを告げることができない現状への悲しみは尽きない。

医療人員としての使命で彼らは仕事を継続し、今このような時期だからこそ一人一人の患者の世話をしたいという気持ちに駆り立てられている。台北慈済病院の専用病棟の主任看護師である陳美慧（チェン・メイフェイ）さんは、「私たちは英雄ではなく、コロナと戦うボランティアです」と言った。彼女は、愛でもって守り、人の身になって考えて初めて、今この時期の対人関係における緊張と對立を取り除くことができるのだ、と述べた。

台北慈済病院は、積極的にコロナ専用の治療病棟を増設することに加えて、病院規格に沿って感染隔離専用ホテルの世話を請け負った。それと時を同じくして、国内外の慈済人は、防疫規制の困難の中で、依然として慈善活動に励んでいる。

同じ五月下旬、證厳法師の最初の弟子である徳慈（ドーツー）師父が亡くなった。法師に追従し、自力更生の生活をして六十年近くになる。徳慈師父は苦労を厭わないように、自分を鍛えれば、衆生に奉仕することができると信じていた。徳慈師父は静思精舎のために家風の模範を示し、常に慈悲と思いやりをもって人に接していた。今この時、人の世の至情として、世に善の力を注ぐことに勝るものはない、と人々に深い感銘を与えている。（慈済月刊六五六期より）

主題報道

疫病の最前線を守り

防疫は病院全体のこと

◎文&撮影・蕭耀華　訳・明陞

昨年初め、台湾全土で感染確定者が三十人余りしかいなかった時、台北慈済病院はそれとは知らずに五人の感染確定患者を収容した。その後、緊急に七十人の医療スタッフを隔離したが、幸い一人も感染していなかった。この経験があった故に、系列の全病院は、細心の注意を払うようになり、五月初めからは新型コロナウイルス感染確定者を受け入れた時、積極的に専門病室を開設した。六月上旬には一日平均百五十人の治療にあたり、治療の最前線は手を携えて前進し、後方から支援しながら、共に今回の使命を果たしてきた。



医療チームに敬意

●台北慈済病院は5月から新型コロナの患者を受け入れる専用病室を順次、増設してきた。医療スタッフは長時間防護服などを身に付けて救命に努めている。本当に体力と意志力の試練だと言える。



不夜城・艋舺（バンカ）

二〇二一年六月三日、台北市が警戒体制レベル３になってからの二十日目の夕方六時四十六分、万華区の廣州街にある艋舺（バンカ）夜市は通常に比べると天と地ほども違っていた。五月になって国内感染が爆発的に拡大し、万華区は感染ホットスポットになり、露店や商店は防疫政策に従って暫時店を閉めた。今回のコロナ禍が社会と経済に及ぼしている影響がどれほど大きいかがよく分かる。



わびしい西門町

二〇二一年五月二十七日午後五時、台北市西門町繁華街の漢中街にあるＭＲＴ西門駅六番出口は、いつもなら車がひっきりなしに行き交い、人で混み合う場所だが、今はいつもと違って静かで、観光客もまばらであった。娯楽施設もクラスターを避けて閉店され、以前の賑やかさが戻るまでには時間がかかりそうだ。（慈済月刊六五六期より）

ステイホームでもさらに力強く支援

◎文・廖哲民　撮影・黄筱哲　訳・高嶋由紀子

昨年一月下旬に台湾で最初の新型コロナウイルスの域内感染者が発見されて以来、慈済はコロナとの戦いの手を休めたことはない。今年五月にコロナ禍が深刻化し、感染拡大防止のために外出が自粛されるようになったことを受けて、慈済はすぐに慈善活動の内容を見直した。スクリーニング検査体制を強化するため、地域や病院の屋外検査ステーションの設置を支援。恵まれない家庭の子どもにオンライン学習のための設備を提供。生活支援のための「安心生活ボックス」を配付。社会が必要とする限り、慈済は常にそこにいる。

「慈済のコロナとの戦いは、数えてみると五百日を超えていました。その間、私たちは手を休めたことはありません」。

昨年一月二十八日、旧暦の正月四日に、台湾で初めて域内感染者が発見された。慈済基金会の顔博文（イェン・ボーウェン）執行長はこう振り返る。

「あの時以来、毎日午前中、静思精舎では『慈済世界防疫調整総指揮センター』の会議が開かれています。四大志業の責任者は、世界的なコロナの流行と変化に対応して、走りながら考えるローリング方式で対応策を話し合ってきました。そして、台湾の深刻なマスク不足を受けた緊急の布マスクの製造、自宅隔離者への安心祝福セットの提供、コロナ禍の影響を受けた家庭や子どもたちへの支援などを行ってきました」。

台湾では、適切な感染拡大防止措置によって、去年の感染状況は比較的落ち着いており、世界の慈済人は、そのリソースやエネルギーを、感染状況が深刻な海外地域の支援に注いできた。ところが、今年五月から台湾の状況が深刻になってきたため、慈済は焦点を再び台湾に

戻すことにし、毎日午前八時ちょうどからオンライン防疫会議を開いて、何らかの行動を取ってきた。医療スタッフは病棟や検査ステーションで奔走し、警察や消防、軍は社会の安全を守る重責を担って昼夜を問わず働き続けた。慈済ではボランティアの人数を絞り、最前線でコロナと戦う人たちや恵まれない人たちに対する支援を行い、集会人数の制限を守りつつ、防護具や生活物資、緊急見舞金等を届けてきた。

長い間、地域の警察官をねぎらうボランティアをしてきた翁千恵（オン・チエンフイ）さんはこう語った。

「ステイホームをするにしても、ずっと怖がってばかりいるのではなく、『自分に何ができるだろうか？社会のために少しでもできることはないだろうか？』

台北市聯合病院陽明院区救急外来の外で、医療スタッフが市民の検体を採取していた。多くのコロナ感染流行地区では簡易検査の定員がほぼ即座に埋まってしまう。最前線で働く医療スタッフや警察官、消防隊員の負担のほどがわかる。（撮影・蕭耀華）



というふうに考え方を変えなければいけません」。

そこで、彼女は自分から警察や消防に必要なものはないかと尋ね、「慈済警察官・消防士とその家族の懇親会」にある資源を集めた。政府の感染拡大防止措置を遵守するため、ボランティアは少人数にとどめ、フェースシールドとマスクでしっかり防護して、専用車両で感染予防に必要な物資を前線に届けた。

慈済が長期的に支援しているケア世帯に対しては、差し迫った必要のない限り、原則としてボランティアは電話訪問に切り替えた。五月中旬から下旬にかけて、ボランティアがケア世帯にかけた近況伺いの電話は、北部地区だけで

慈済は、台南市新化体育公園（右上）と松柏育楽センター（右下）に2棟のプレハブ検査ステーションを寄贈した。作業員が雨の中、工事を急いだおかげで、建物は予定よりも2日早く完成し、地域の検査体制が強化されただけでなく、医療スタッフにとっても快適で安全な仕事環境を提供することができた。







も五千本を超えた。その他、高雄のフェースシールド製造の場所を、静思堂から各ボランティアの自宅へと柔軟に変更した。一切の「愛の行動」が、常ならぬ中でも変わることなく「愛を伝えた」のである。

雪中に炭を送り、不足を補う

政府の感染防止策の規定により、店内での飲食が禁止され、テイクアウトのみとなると、慈済ボランティアは理念に賛同する飲食店と協力し、愛心弁当を作って菜食の推進を続けた。台北市の慈済ボランティア・紀雅瑩（ジー・ヤーイン）さんは、最前線でコロナと戦う「戦『疫』部隊」を励ますため、慈友会、北区慈済名誉董事会と共に資金を集める一方、菜食レストランを支える意味もあって、協力してくれる飲食店と話し合い、コロナ対策の大変な仕事を担う人たちに、二カ月間にわたって無料の弁当を届けた。台北市東部のあるレストランの相談役は、「植物性のパワーあふれるお弁当で、皆さんに元気と活力を届けたいのです」と語った。

「愛心弁当」を受け取った台北慈済病院からも心温まるお礼のメッセージが届いた。病棟看護師長の陳美慧（チェン・メイフイ）さんは、カードにこのように書いた。

「みなさんがコロナ対策の医療チームに届けてくださった昼食で、おなかがいっぱいで幸せな気持ちになっただけでなく、コロナと戦うエネルギーにもなりました。本当にありがとうございました。五行の考えを取り入れたバランスのよい健康野菜料理はどれもおいしくて、ベジタリアンではないスタッフも毎日楽しみにしていました。みなさんの心遣いと愛が伝わってきて、胸がいっぱいになりました。みなさんのおかげです！」

紀さんも感激してこう言った。

「全身に防護具を着けた医療スタッフが、食事もトイレもままならない中で長時間勤務しているのを見て、『彼らのために何かできないだろうか』と思いました。それで、彼らが『鎧』を脱いだ後に、すぐ食べられるものがあったらいいなと思ったのです」。

彼女はほかにも、生き物を守り、殺生を減らす菜食を広めることで、一人一人



に愛の心が湧き、コロナ禍が一日も早く終息するよう祈って欲しいと願った。

各自治体の警察官は、感染拡大防止への調査協力、市民へのマスク指導、さらに日常の取り締まり、パトロール、交通事故や治安事件の処理などで、常に不特定多数の人と間近で接触しなければならないことから、高い感染リスクに晒されている。そこで、ボランティアは急いで防護服、手袋、アルコール等を届け、勤務時の「より一層」の安心を提供した。

台湾全土で検査を必要とする人数が急増したことから、各地の検査体制が逼迫し、地方自治体からプレハブ検査場の増



設が次々と打診された。慈済では土地の広さを詳細に検討し、長期的に協力できるメーカーを急いで探し出し、それぞれの場所に合った検査ステーションを建てていった。六月中旬現在で、十一の自治体に二十五棟の検査ステーションが次々と完成した。

台北市聯合病院陽明院区に建設したプレハブは、二十四坪のハイグレードな検

台湾全土ではコロナ感染の急拡大で、警察や消防の出動件数は増加の一途をたどっており、防疫物資の需要も増え続ける。慈済はフェースシールドと手袋を贈呈した。（右・撮影・新北市の丁月娥）（左・写真提供・苗栗の劉宝菊）

査ステーションである。順番待ちエリアや接種後の経過観察のための待機エリアなども設置されている。この工事を担当した慈済基金会建設処スタッフの鄧乃仁（ドン・ナイレン）さんは、こう話してくれた。

「メーカーさんは人手不足にもかかわらず、社会が必要としていることだと分かってくれて、すぐに建てられるよう、連日急ピッチで材料の発注や納入、そして、残業して組み立ててくれたのです」。

同じ頃、慈済は台南でも検査ステーションの建設支援を進めていた。建設処関係者と作業員らは雨の中、五日足らずで新化体育公園と台南松柏育楽センター駐車場の二棟のプレハブを建設し、台南市衛生局に寄贈した。

恵まれない家庭に救いの手を

五月十五日、台北市と新北市のコロナウイルス警戒体制がレベル３に引き上げられ、外出の自粛が呼びかけられた。低所得世帯は外での買い物もままならないうえに、さらに収入まで失ってしまった。これを慮った新北市社会局は真っ先に慈済に連絡し、社会福祉センターが必要としている物資について話し合った。慈済はすぐに物資を調達し、たった四時間足らずで包装して箱詰めまで済ませた。即席麺やビスケット、『静思語』など十種類以上の生活必需品が入った「安心生活ボックス」と、一世帯につき十キロの白米が五日とかからずに北部へと運ばれた。そして、新北市三重区社会福祉センターなどに到着し、社会局のソーシャルワーカーによって管轄内の低所得世帯に届けられた。

新北市政府社会局の黄逢明（ホワン・フォンミン）専門委員は、感動してこんな話をしてくれた。

「安心生活ボックスのおかげで家族の状況は変わりました。ある孫育て中のお祖母さんは、孫に食べさせるお米がないことを心配していましたが、安心生活ボックスのおかげで、収入のない期間も孫におなかいっぱい食べさせられるとほっとしていました。身内が陽性と判定されて全員が自宅隔離となった家では、何気なく『静思語』を開いて読んだ時、不安だった心もだんだんと落ち着いてきたそうです」。

慈済は弱い立場の人を支え、警察・消防・医療を守る

2021.01.01 から
2021.06.21 まで

医療用物資・器具 計1,665,764点



マスク
74,940枚



手袋
1,161,200組



アイソレーションガウン、キャップ、シューズ
56,980点



防護ゴーグル フェースシールド
139,435点



額式体温計
84個



福慧（折畳式）ベッド
1,115台



福慧テーブル·いす
20セット



アイソレーションカバー
1,920枚



簡易検査用試薬
227,600本



アルコール消毒液
2,360リットル

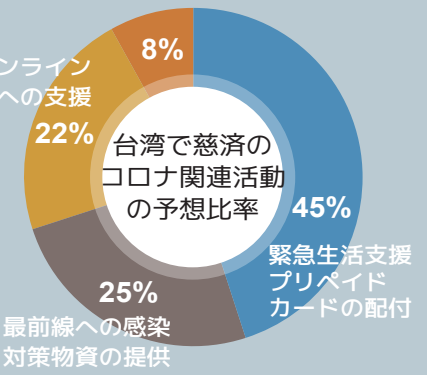


酸素濃縮器
100台



人工呼吸器
10台

「安心生活ボックス」の提供



救援・栄養サポート物資 計347,468点



安心生活ボックス
14,073箱



安心祝福セット
14,800個



感染予防セット
300個



福慧八宝粥
744缶



保温衣類
900点



シャンジー麺（即席麺）
1,554袋



白米
142,130 kg



シャンジー飯（即席飯）
252袋



健康精進弁当
24,931人分



エコ毛布
2,429枚



鍋用麺
62,560袋



乾燥食品
30,000箱



ジンスー本草飲（漢方茶）
10,900パック



健康飲料
22,530パック



インスタント雑炊
1,300袋



コロナ禍救済金
2,673件



生活物資用プリペイドカード
271枚



ノートパソコン
103台



Wi-Fiルーター
15,018台

慈善事案通報専用ダイヤル **0800-787-080**

最前線のソーシャルワーカーによって届けられた安心生活ボックスが困難な家庭の状況を改善したことは間違いない、と黄さんも確信している。感染が深刻化する中で、政府と民間が手を携えて取り組んだこと、また社会で立場の弱い人への奉仕に対する揺るぎない意志、それらに何よりも感動を覚えたのだそうだ。

教育部は、五月十九日から台湾全土の学校で全面的にオンライン授業に切り替えると発表した。慈済ボランティアは電話慰問を通じて、多くの低所得世帯の子どもたちがオンライン学習用のパソコンを持っていないために授業を受けられないこと、あるいは、スマートフォンの小さな画面で授業を受けるほかなく、効率が悪いことが分かった。そこで、慈済のボランティアとソーシャルワーカーたちは具体的に検討し、ノートパソコンの購入費用を補助することにした。

慈済基金会北部地区のソーシャルワーカー・陳宜適（チェン・イースー）さんは、あるケア世帯の例を挙げてこう教えてくれた。その家には職業高校の広告デザイン科で学んでいる娘さんがいるのだが、家にパソコンがないため、いつもクラスメートのノートパソコンを借りて宿題をしていたそうだ。前向きに頑張る娘さんの姿を見かねて、学校の先生が慈済ボランティアに報告してきたのだった。ボランティアたちは、彼女が安心してオンライン学習ができるように、デザイン専門の学生にふさわしいパソコンを選んであげた。

ソーシャルワーカーの魏伶娟（ウェイ・リンジュエン）さんによると、慈済ボランティアが長期ケア世帯に電話で近況を尋ねる際は、いつもの会話に加え、「お仕事に影響はないですか？」、「お子さんは在宅学習で何か困っていませんか？」、「生活はどうですか？」などと尋ねることにしているそうだ。新住民家庭や隔世家庭の中には、経済的に打撃を受け、すぐに子どもたちの学習に必要な物を揃えることができない家庭も少なくない。そこで、子供が安心して勉強できるよう、ボランティアたちは古いノートパソコンを整備して、必要としているケア世帯に寄付すると共に、補助の申請を手伝ったり、三カ月分のブロードバンドの設置を支援した。

また、長く教育問題に取り組んできた台湾大学電機学科の葉丙成（イエ・ビンズン）教授らの調査で、ステイホーム期間中、家にネット環境がない貧困世帯の子どもが二万人いることが分かった。そ

ここで教授は、慈済と協力して４Ｇのルーターを提供する資源を探した。その過程で旅行会社のケイケイデイ（KKday）や無線ルーターメーカーの桔豊科技公司（Jetfi）などからも協力してもらえることになった。慈済は一万五千台のルーターを二カ月間レンタルし、六月七日に各自治体の教育局に届け、貧困家庭に無償提供した。これにより子供たちも快適にオンライン学習に取り組めるようになった。

警戒レベル３が六月末まで延長されることになった。まもなくやってくる二カ月の夏休み期間に子どもたちがきちんと食事が摂れるよう、慈済は六月十一日、まず基隆市政府と協力して、市内二千世帯余りの恵まれない家庭に「安心満腹ボックス」と「健康野菜果物ボックス」を提供することにした。「安心満腹ボックス」の中身は「安心生活ボックス」とほぼ同じで、「健康野菜果物ボックス」は、地元の農民の応援も兼ねて地産地消とし、七月と八月に一回ずつ配送することにした。現在、他の自治体とも支援について協議をしているところだという。

「このコロナ禍にあって慈済はどこへ行ったのか、と少なからぬ人に聞かれました。私は、『慈済はずっとここにいるし、忙しくて休む暇もありませんよ』と答えました」。顔執行長によると、感染拡大防止や支援のための活動は続けられており、この期間中、恵まれない人たちへの「安心生活ボックス」も、自宅隔離者への「安心祝福セット」も、物資の手配から包装まで全てが一大作業なのだが、ボランティアも動員できない今、重くて大変な梱包作業の大半は、静思精舎の尼僧たちや花蓮本部のスタッフが担っているのだという。

「静思精舎は本当に世界の慈済人の後ろ盾なのです」。

顔執行長は、慈済は着実にやるべき仕事をし、ひたすら自己の無私と他者の愛を信じ続け、希望を持ち続けていると言う。

「六月中旬までの統計で、慈済が寄贈した感染対策物資や救援物資はすでに二百万点余りに上っています。この数字からも、私たちが支援の手を休めていないことが分かっていただけたと思います。コロナが収束しない限り、慈済のコロナとの戦いも中断することはないのです」。（慈済月刊六五六期より）

コロナ禍の台湾アラートと慈済の寄り添いケア日誌

訳・心嫈

5・11 台湾は市中感染の段階に入り、全土で警戒レベルがステージ2に引き上げられた。

5・15 台北市と新北市は警戒レベルがステージ3に引き上げられた。5月28日まで台湾全土のレジャー施設が閉鎖され、宗教活動も全面的に禁止となり、不要不急の外出の自粛が呼びかけられた。

- 慈済は台湾全土の静思堂とリサイクルセンターの対外活動を暫時中止にし、資源回収拠点では回収物の受け入れを停止した。
- 本日より6月4日までの統計・高雄慈済ボランティアが合計3万7千枚のフェースシールドを製作し、それらは第一線で働く警察、消防隊員、医療人員に提供された。

5・16

- 北部のある高齢者施設に多機能折り畳み式ベッド（福慧ベッド）55床を寄贈した。そして施設では療養者の防疫区分けを整えた。
- 台北慈済病院は、元来の専用病室エリアに加え、新たに4つのエリアを順次開設して入院可能な病床数を増やした。

5・17 台湾全土の一日当たりの新規感染者が、今までで最も多い535人となった。

- 慈済精進資源ネットワークは「防疫・耳を傾けよう」という特別コーナーを設け、人々を招いて祈りと礼拝、精進活動を行った。

5・18 教育部（文部科学省に相当）は、翌日から台湾全土の全ての学校を休校とし、自宅でオンライン学習するよう公布した。

5・19 台湾全土で警戒レベルがステージ3に引き上げられた。

- 慈済は、海洋パトロール隊台中支隊・台北・新北市、及び桃園消防局に漂白剤やアルコール消毒液を寄贈した。

5・20

- 台中慈済病院は市政府の要請に応じて検疫所を開設した。
- 花蓮慈済病院が新型感染症検体採取検査ステーションを開設した。

5・21

- 重症病床の需要が増加し、台北慈済病院は集中治療室を増設した。

5・24

- 慈済は、医療スタッフが休息できるよう、福慧ベッド10床と安心祝福セット10個を緊急手配し、万華区剝皮寮の検疫所に届けた。
- 花蓮で用意した3千箱の安心生活ボックスが新北市の三重区と双和区の社会福祉センターに届けられたのち、社会局によって地域の弱者世帯に贈られた。

・台中慈済病院は、台中市対策本部に呼応して、2日続けてクラスター感染が発生した学校に検疫所を開設し、教師、生徒、保護者など約4百人の検疫を行った。

5・25

台湾全土の警戒レベルがステージ3のまま6月14日まで延長され、自宅でのオンライン学習も延長となった。

5・26

コロナ感染の死亡者数が初めて1日で2桁になった。ステージ3の警戒を更に強化する措置がとられた。

・大林慈済病院は専用のICU病棟24床を追加した。

・IT関連の聯華電子（UMC）社より80万セットのPVC手袋が寄付され、フェースシールドと共に、各県市の警察や消防に届けられた。

・新北市役所に寄贈した3千個の安心祝福セットが、自宅検疫や自宅待機している人々に届けられた。その後、台湾全土に1万4千個余りを発送した。

5・29

・台中慈済病院は専用病棟を開設し、患者の受け入れを開始した。

・新竹市政府の要請に応えて、医療関係者のワクチン接種会場で、連日の誘導に当たった。

5・30

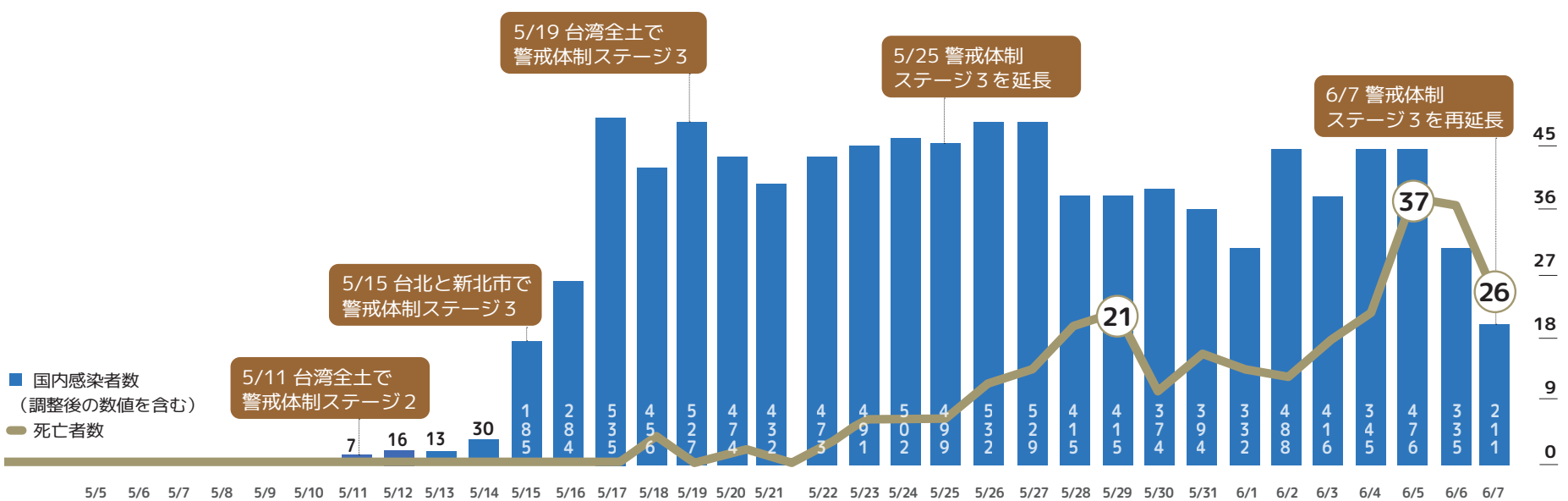
今回の感染拡大による死者が100人を越えた。

・慈済は花蓮県政府衛生局からのプレハブ検疫所開設要求に応じ、緊急に苗栗慈済パークの慈済防災教育センターに設置されてあった仮設住宅2棟を、花蓮衛生局が指定した場所に移設した。

5・31

・台北慈済病院は新北市衛生局の要請に応え、病院と同様の規格の下に、同市新店区の隔離専用ホテルの感染者の世話を請け負った。

・台北市立陽明病院の要請により開設されたプレハブ検疫所は、6月5日から救急外来脇で



使用が始まることになった。

6・01

- 屏東県政府に6百個の安心祝福セットと、同県里港郷にプレハブ検疫所1棟を寄贈した。

6・02

- 台北慈済病院が地域に検疫所を開設した。
- 慈済が台南市で2個所の検疫所の開設を支援した。
- 花蓮県秀林郷佳民村、景美村、銅門村、水源村に330箱の安心生活ボックスを寄贈した。累計で台湾全土に1万4千個余りを発送した。

6・03

- 膨大な医療物資の需要に応じて、6月3日衛生福利部の豊原病院と三軍総合病院にそれぞれN95マスク、防護服、ヘアキャップなどを届けた。
- 慈済は、慈済大学と中央研究院が共同開発した「新型コロナウイルス抗原スクリーニング試薬」60万回分を購入し、検疫能力を高めるために各県や市役所、医療機関に発送した。最初に台北市立聯合病院に1万回分、続いて新北市衛生局に5万回分、新竹県衛生局に5千回分を発送した。

6・06

台湾全土の累計感染者数が1万人を超えた。

- 苗栗県にあるハイテク工場で、外国人労働者の間にクラスターが発生したため、台中慈済病院は医療チームを派遣し、竹南テクノロジーパークにある公園に開設された検疫所へ支援に駆けつけた。慈済は新竹市役所、苗栗県政府と協力して検疫所を開設した。これまでに慈済は11の県市に25の検疫所を開設している。

6・07

台湾全土の警戒体制ステージ3は6月28日まで延長された。

- オンラインの教育プラットフォーム、観光業界、ハイテク業界を結集し、1万5千台の4Gルーターを各県や市教育局に届け、弱者世帯の子どもたちがオンライン学習できるよう支援した。

6・08

- 310台の酸素濃縮器を緊急購入し、新北市衛生局に30台、台北市衛生局に20台寄贈した。
- 台中市の路上生活者の健康ケアのために、マスク、消毒用ジェル、石鹸、福慧八宝粥など11品目が入った感染予防セット3百個を台中市社会福祉局に届けた。

6・11

- 基隆市政府は慈済基金会の支援と地元の資源を結集し、「安心満腹ボックス」と「健康野菜果物ボックス」の2種類の物資を、緊急支援が必要な家庭で夏休みを過ごす市内の学生2131人のために配送することにした。

6・13

- 台南善化静思堂は政府の要請に応えて、大規模なワクチン接種会場を設置し、奇美病院の医療スタッフが2日連続でワクチン接種を担当した。また、他の各地の慈済静思堂もボランティアによる消毒が完了し、接種会場として使用が始まった。（慈済月刊六五六期より）

資料の提供・顔婉婷（慈済基金会文史所職員）

開発の源は慈悲心

「ジンスー本草飲」は祝福されたお茶

疫病が蔓延した時の人々の無力感と恐怖感は、見るに忍びない。中医学と西洋医学を融合して開発された「ジンスー本草飲（薬草茶）」には、体の不調を整えるばかりでなく、敬虔な祝福の気持ちが込められている。

文・陳麗安　訳・葉美娥

慈済基金会は新型コロナウルスの感染拡大から一年余り、防護フェースシールドなどの感染予防物資、ジンスー穀物パウダーや即席飯などのインタント食品を提供して、第一線で努力している警察や消防隊員を支援して来た。昨年末からは健康茶である「ジンスー本草飲」も加わった。お湯を注いだり煮出したりして手軽に飲めるものだ。この「ジンスー本草飲」は他の防疫支援物資と一緒に海外にも送られ、既に三十三の国と地域に届いている。開発チームは、この「ジンスー本草飲」を通して、祝福と平安をもたらしたいと願っている。

世界各国の専門家は皆、知恵を絞って、新型コロナウイルスに対抗しようとしている。街には様々な漢方薬も処方されているが、慈済が提供している「ジンスー本草飲」には、どんな特徴があるのだろうか。

天地万物、全てが薬である

「ジンスー本草飲」は、花蓮慈済病院の中医学と西洋医学の医師たちが手を携えて開発した漢方の複方である。昨年三月、新型コロナウルスによる感染症が世界各地に蔓延した時、人々は恐怖で為す術を知らなかった。證厳法師はその状況を見て忍びなく思い、中医学の智慧を借りて、誰もが飲めるような薬草茶を開発するよう望んだ。

花蓮慈済病院は、慈済の林碧玉（リン・ビーユー）副執行長と林欣栄（リン・シンロン）院長の統率の下に、何宗融（ホー・ゾンロン）副院長、中医学部門団体、黄志揚（ホワン・ジーヤン）副院長、そして心・血管とミトコンドリアに関わる疾病研究センターのメンバーが集結して、

台湾在来の薬草を組み合わせ、多くの漢方の複方による薬包を開発して実験を行い、最終的に現在の「ジンスー本草飲」が出来上がった。

黄副院長によれば、研究開発の方向としては、主にウィルスが細胞に侵入することを阻止し、ウィルスの増殖抑制、サイトカインストーム（攻撃的な炎症反応の一種）をコントロールすると同時に、強力な変異株ウィルスを克服することだそうだ。また、中医学部主任の何副院長によると、開発成功の鍵は、開発チームが證厳法師に開発過程を報告した時に受けた、意外なヒントによるものだったそうだ。

證厳法師は、《薬師経》の中に記載してあるように天地万物の全てが薬であるならば、あらゆる植物に薬効成分があり、中医学か西洋医学の薬かを問わず、全ては自然の草木に由来すると考えておられた。法師は、自分の幼い頃の記憶に、昔の農業社会では、ミソナオシとヨモギが病気を追い払う魔除けだと信じられ、病院への見舞いや墓参り、お悔やみに行く前にミソナオシの葉を身に付け、家に帰ってからはミソナオシを煮出した湯で体を浄めていたことを覚えておられたのだ。「祖先の経験にある魔除けとは、抗菌や毒素を取り除く効果があることを表しているのかもしれません。科学的な観点から、これら植物と人体へのウイルスの侵入を防ぐことに、関連があるかどうかを探究してみてください」と法師が指示した。

研究チームは、試しにヨモギとミソナオシを入れてみた。「データが示したのです。ウイルスの細胞への侵入を遮断する現象が際立っていることが判明し、研究チームも



花蓮慈済医院の「合心研修会」が、3月に花蓮の静思精舎で行われた。医療スタッフは製造工場で「ジンスー本草飲」の包装を手伝った。（撮影・陳毅麟）

びっくりしました」と何副院長が言った。

最終的に市販されている「ジンスー本草飲」は、台湾に自生する八種類の薬草である「ヨモギ・ミソナオシ・麦門冬・ドクダミ・桔梗・甘草・シソの葉・菊の花」を使っている。何副院長の説明によると、これらの薬草を配合すると、薬草の分子が単一で効果を発揮するのではなく、漢方の成分が互いに作用し合うことで「多標的」に効果が発揮されているのである。

中医学の医師が強調する「陰陽調和」の角度から見ると、中医学は免疫力である「正気」を養うことで心身を強健にすることを重視する。何副院長は、白黒の勾玉を組み合わせた陰陽太極図を例に挙げ、陰と陽のバランスが取れて初めて、体は健康になる、と説明した。「人体の正気が不足している時は、『陽』で補うのです」。この八種類の薬草を組み合わせることで発揮される効能は、正に漢方で言うところの「正気で邪気を征す」にあたるのだそうだ。従って本草飲は健康茶として日常的に飲用するのに適している、と何副院長が説明した。

中医学と西洋医学、同時治療

證厳法師は、日頃から中医学と西洋医学がバランスよく発展することを期待しており、漢方の薬草研究を重視していると言っている。脳神経科学領域の専門医である林院長は、漢方薬の「当帰」から抽出した成分を、西洋医学の新薬の開発に応用したこともある。

何副院長はさらに詳しく説明してくれた。世界には漢方薬の材料から精錬された西洋薬はたくさんある。例えば八角のウイキョウからシキミ酸（Shikimic acid）を抽出して作られるインフルエンザ治療薬、青蒿（セイコウ）から抽出されたアルテミシニンからは、マラリアに効く西洋薬ができている。「ジンスー本草飲」は単純に八種類の薬草を組み合わせた薬草健康茶なので、安全且つ副作用が少ない。

粉末状の「ジンスー本草飲濃縮散」は、既に衛生福利部（日本の福祉保健局に相当）の輸出許可を取得している。台湾では順次、警察や消防、衛生局、医療に関わる第一線の人員に提供しているだけでなく、感染拡大が深刻になっている国や地域にも輸出している。

感染拡大が続く中、チームは続けて開発を進めた。最初は花蓮慈済病院が個人用サイズの小パックを作っていたが、「ジンスー人間（じんかん）社」が量産するようになってから、十二パック入りの家庭用サイズが出回るようになった。その後も、感染拡大が深刻になっているインドを例にとって考えると、生薬を煎



南アフリカはアフリカ諸国の中では最も新型コロナウイルスの感染が拡大している国である。3月初め、ヨハネスブルクのテンビサ・コミュニティの慈済リハビリセンターが再開され、地元ボランティアが「ジンスー本草飲」を受け取った。（写真提供・慈済南アフリカ支部）

じるのが不便なことがわかり、一パック十五CC入った、薄めてもそのままでも飲める濃縮液を開発した。

何副院長が率直に語るように、研究開発の当初、中医学と西洋医学の医師たち、または慈済ボランティアの中にも懐疑的な目で見る人がいたそうだ。しかし、チームは依然として開発に力を入れたのだった。「『ジンスー本草飲』開発の初心は、證厳法師がコロナ禍で無力感を感じている人々を見るに忍びなく、皆が健康になることを望んだことに帰するのです。『ジンスー本草飲』の目的は利潤の追求ではなく、人助けをすることです」と何副院長が言った。

「精舎の尼僧と薬草をどこから仕入れるかを討論した時、『既に種まきをしました』という答えが返って来ました。その種はどこから来たのですか、と尋ねると、ボランティアが無償で提供してくれた、とのことでした」。僅か二カ月の間に、研究チームは薬草の収穫ができるという知らせを受け取った。「善行のスピードの速さには、心を打たれました」と何副院長が言った。

薬草は慈済の大愛農場で栽培されているだけでなく、台湾各地からも購入している。そして、静思精舎の「協力工場」が今回の本草飲の主な生産ラインである。生産する前の食品衛生法規の検証から、特性の異なる薬草の粉砕過程、計量、パック詰めまで、生産を急いだのは一刻も早く出荷して、より多くの人を助けようとの理由からである。

花蓮慈済病院での中医学と西洋医学の協力は研究の場だけにとどまらず、救急外来から、一般外来、ＩＣＵ、緩和ケア及び介護ケアにまで及び、人々に中医学と西洋医学合同治療の選択も提供しており、中医学が人々に奉仕できる領域を拡大した。林院長は次のように語った。花蓮慈済病院は中医学と西洋医学の合同治療を推進する以外に、新型コロナウイルス感染症に向き合い、医療チームとして積極的に臨床ケアと研究をすることで、感染防止と治療の両方からより多くの人を助けようとしている。

「本草飲」の製造に参与した人たちは皆、少しでも感染症に苦しむ人々に貢献し、より多くの人々の健康を見守ることができるようにと期待を懸けている。

（資料の一部は花蓮華慈済病院の提供）

（慈済月刊六五六期より）

永遠なる精舎の大師兄

僧衣を探したあの晩

病院からの知らせで、私は急いで寮に戻り、大師兄の着替え用の僧衣を探したのですが、どうしても見つかりませんでした……

インタビュー&編集・陳美翌、林淑真
口述・釋德穎　訳・慈願

徳慈師父㊟は私たちの大師兄で、最も證厳法師に孝行を尽くしたお弟子さんです。たとえ彼女が間違いを犯してないのに、法師に叱られたこともありましたが、法師に対する尊敬の念は変わらず、少しも気にしていませんでした。

私たちが出かける前にはいつも、「大声で話をしないこと。車の中では出家人としての威儀を正すこと。ふざけてはなりません。たとえ周りに一般の人がいなくても出家人としての立ち居振る舞いをするのですよ」と注意してくれました。

大師兄は、一代目の一番弟子としての模範を忘れたことはありません。また

㊟師父（スーフ）：精舎の尼僧への敬称。



（写真提供・花蓮本会）





農耕で自力更生

一九六七年の冬、田植えをする徳慈師父（上の写真・左の人物）。陳貞如が（上の写真・右の人物）が落ちないように徳慈師父の手を持っている。一九六四年から一九九一年まで精舎の師父たちは二十一種類の内職をして精舎の生活を改善し、慈済志業を支えた。徳慈師父は、どんな困難や辛いことにも必ず方法を考えて試した。（上・写真の提供・花蓮本部）（下・撮影・黄錦益）

芸術の伝承者

徳慈師父は敬虔に注意深く宇宙大覚者の仏像製作に専念し、「陶慈房」で作られた仏像は、全世界の慈済人の精神の象徴となっている。素人だからと初めは謙遜していた徳慈師父だったが、一九八七年に陶磁器作りに出会い、縁があってテーマ創作の道が開かれた。徳慈師父が開設した「陶慈房」は、国内外の芸術家や職人、愛好家たちが互いに励まし合う中で、創意あふれる作品を出した。



（撮影・陳友朋）

法師の代わりに、いつも若いお弟子さんたちの面倒を見ていました。

彼女は私たちを導いて慈済の気風を守るだけでなく、自分自身に対しても厳しくしていました。

私と大師兄は同じ部屋で生活していたのですが、今のような暑い日でも大師兄はいつも整然とした身なりをしていました。部屋でしばしの休息をしても靴下を脱ぐこともありませんでした。彼女は皮膚が弱かったので、暑い時に長時間靴下を履き、夜になって脱ぐと足の裏の皮膚が赤く爛れそうになってしまうのを見て、忍びなく思ったこともあります。

私の心の中の大師兄は、行住坐臥の四威儀の全てにおいて常にいつも通りで、最も厳しい修行人でした。中でも感服させられたのは梵唄（ぼんばい）で、全く自然体でした。

長い間大師兄と一緒に過ごしたことで、お話しする機会も多くあり、何事も真面目に取り組んでいました。八十歳になった時、「私は八十歳になりましたが、心は二十六歳のままです」と私に言いました。

大師兄の精神は若者に少しも負けていませんでした！もしも今年の手術後に健康を損なっていなかったら、ばりばり働く彼女には誰も追いつくことはできなかったでしょう。

私は常々思っていたのですが、大師兄は気が短かったので、何をするにも人より早くできたのだと思います。しかしよく考えてみると、精舎にいる三番弟子である徳融（ドーロン）師父も、亡くなられた四番弟子の徳恩（ドーエン）師父も同じで、二番目弟子の徳昭（ドーツァオ）師父はもっと気が短かったため、何をしても効率が良かったのだと思います。

その実、法師も気が短い方なので、法師が私に目くばせした時、私たちは法師の思われていることがはっきり分からないうちは尋ねることもはばかられました。とにかくすぐ作業に取り掛かれば間違いないのです。

法師は初期の弟子たちに対してとても厳格でしたが、今はそうでもありません。思うに、今精舎にいる同門の弟子は皆、法師に追随したいと思うなら、遅れを取ってはいけないのです。

或るボランティアが私に、これほど長く大師兄と過ごして、どんな印象をお持ちですかと尋ねました。私は思うに、大師兄の法号が「徳慈」であることを考えると、その名前の通り徳行と慈悲が備わっておられ、一心に法師の教えに奉じ、謙虚で、誠実に力を尽くし、話すべき事は話しても余計なことは話さない、そのように正直な方でした。

五月十一日の夜、徳悦（ドーユェ）師父からの電話で、大師兄の世話をしてい

た看護師から、体が浮腫み、脳にも異常をきたしているから、あまり長くないかも……と言われ、すぐに大師兄の着替えを持ってくるように言われました。

私はすぐに部屋に戻って探しました。ですが、どうしたことか、その日、いくら探しても見つかりませんでした。

思ってもみなかったことでした。私でさえ一、二着の着替えがあり、外出時には良い方の僧衣を身につけ、精舎では古い方を着ているのです。しかし、大師兄は着替えの僧衣を全く持っておられなかったのです。

服を探すように言われたということは、もうそろそろなのだろうか？と思いました。大師兄のとても古い下着を見て、悲しいと共に気が急いて、探しながら、「大師兄、なぜこんなに突然なのですか？」とこらえきれず、涙が溢れてしまいました。

仕方なく、マイクで徳佩（ドーペイ）師父を呼び、衣服部で下着を作ってもらい、ちょうど大師兄と体格が似ている人から新品の僧衣を借りることにしました。それから、大師兄の足が浮腫んでいるため、大きめの靴と靴下を用意しました。

作ったばかりの棉の服は洗うとシワになるので、徳仰（ドーヤン）師父の世話をしている外国籍介護士のイカさんにアイロンをかけてもらいました。イカさんは泣きながらアイロンをかけていたので、私ももらい泣きしました。大師兄が病気になった時はイカさんが着物を洗ってあげていたので、大師兄は彼女をとても可愛がり、良い物があると彼女にあげており、入院する直前になっても何かあげようとしていました。

誰も大師兄がこんなに早く亡くなるとは思ってもいませんでした。私たち同門相弟子は、法師がご在世の間は必ずお供し、互いに支え合うと発願していたのです。私は心の中で、大師兄はまだ法師に尽くそうと考えていたのではないかと思いました。

大師兄はずっと陶芸をされていたので、法師は《法華經》二十八品の陶器の掛け軸を作るよう指示しました。まだやり遂げていないこの仕事に対して、きっと心残りで仕方がないのでしょうが、無常の訪れには為す術もありません。

大師兄と同じ部屋で三、四十年近く過ごし、私を一番可愛がってくれました。私はその大きな幸せをとても大切にしています。心から大師兄の「随時随所で法師の精神を奉じ、縁を把握して事を為す」態度に感服しています。今生、法師の内弟子となり、大師兄の教えを得た善縁に感謝しています。阿弥陀仏！

（慈済月刊六五六期より）

【證厳法師のお諭し】

人類に試練を与える重大教育

人類は今回の疫病で高い代価を払っていますが、
その中から学び、善を以て悪を制し、
肉食を菜食に転ずれば、人間（じんかん）を利するようになるのです。

◎訳・慈願　絵・林順雄

今回の感染拡大では、複雑な感情が行き交っています。毎日良いニュースを待ち望み、感染者数が増えずに減少すると、緊張で張り詰めていた心が少し和らぐのです。しかし、厳格な感染予防はまだ緩めるべきではなく、特に猛烈な感染力を持つ変異株に対しては、一波が鎮まらぬ中にまた強力な一波が来ることに注意を払わなければなりません。

私たちの医療体系の中で働くスタッフが、こんな時でも愛の心をもって、日夜苦労して人々の命を護っていることに感謝します。しかし、彼らは辛いとも言わず、喜んでやれば苦も楽になると言い、働く時間を気にすることもなく、たとえ疲れていても懸命に人命を護っているのです。いつも患者の感謝の言葉を聞くたびに、医療スタッフが人々の生命を護って良能を発揮できることこそが、人生の価値の核心であると、きっと感じたと確信しています。

慈済の慈善志業は益々大きな責任を担うようになり、あらゆる方面を疎かにせず、関心を寄せています。学校側が「登校せずに授業は続ける」ことにしたので、ボランティアは中古のコン



ピューターを手入れして、困窮家庭の子供たちがオンライン授業に参加できるよう提供しました。感染拡大で多くの人が職を失ったり、収入が少なくなったため、慈済は人力と物力を尽して、生活ボックスや野菜ボックスを送って安心して生活してもらうことで、細やかな支援を続けています。

世界的な感染拡大の中、慈善志業とは毎日経験して学び続けることであり、責任を担う力が一・五倍、二倍、十倍へと上り、利用されることで価値のある人生を送っていることに感謝しています。より多くの人が援助の手を差し伸べてくれることを期待し、慈済が一点一滴の力を寄せ集めて世界に奉仕することを願っております。

人類は今回の疫病で高い代償を払っていますが、その中から学ぶことも多いのです。恐怖を以て学びとし、世間の人にどのようにして教えていけばよいかを深く考え、受ける側と授ける側の間で、道理を明らかに示し、悪を善に転じ、肉食を菜食に変えて、善の力エネルギーを結集して「疫」を「益」に転じさせるのです。

今までのように大自然の事は自分には関わりがないと考えているかもしれませんが、日々時間に追われて、もっと多くのお金を儲け、より快適な衣・食・住・行動に浸っていれば、欲念は益々燃えさかり、業を造り続けることになります。今全世界がパンデミックにあって、各国の情勢を良く見聞きするうちに、仏陀が言った、「人生は苦であり、この世は苦難多々である」という言葉が現実のものとなっていることを感じるのです。欲念を押さえ、なぜ疫病が発生したかを正視する時です。これ以上物欲の追求をしなくなれば、こんなに多くの汚染を作り出すことはありません。身、口、意の欲を抑制し、足ることを知って幸福を感じ、福を知れば浪費をしません。知って止まることができれば、悪から善に転じ、時間と共に善業を積むことができます。

人類の口の欲のために、動物は狭い空間の中に束縛されて飼育され、自由を奪われたまま、捕まえられて殺され、高く吊り下げられて、消費者が買いに来るのを待っているのです。消費者は家に帰ると、小さく切ってから沸騰したお湯の中に入れ、それを食卓にのせて皆で食べます。なんと残忍なことでしょう。

四両（百五十グラム）食べたら半斤（三百グラム）返すことになり、食べた量によらず、その因縁が生じたら償わなければなりません。残忍な業のゆえに、人類は共同で苦難を背負うのです。

食べることで生命の借りを作るようなことをせず、口の欲の為に心が狭くなって、動物の苦しみを見たり感じたりしなくなるべきではありません。心を広くし、放生や護生、生霊を愛護して萬物が共生できるようになれば、天地は無限に広くなるのです。

口から命を呑み込むのではなく、道理を語るべきであり、敬虔に大切な食事を菜食にすべきだと呼びかけるのです。先ず自分に自信と願力を培えば、自然と呼びかけに力が入ります。自分にできると信じてから、人にもできると勧めるのです。この天から授かった大任に対して、私たちは天と地の間で責任を担い、勇敢にしっかりと前進すべきです。もし歩みを止めれば、時間は無意味に流れ去ってしまいます。

未だ感染拡大が終息してないため、未来は未知数です。心配しても役に立たず、最も大切なことは今回のコロナ禍が「大いなる教育」で、人類に試練を与える重要な授業であり、人類が再出発する教育の機会であることを忘れないことです。欲念を押さえ、命を大切にすれば、疫災は自ずと終息します。心して精進を続けてください。

（慈済月刊六五七期より）

特別報道・慈済55

医療における慈善と慈善医療

口述・黄文国（台北慈済病院特殊需要歯科部主治医）
インタービュー&編集・陳麗安　訳・本誧



問：台湾の医療はこれほど普及しているのに、施療はまだ必要なのでしょうか？

答：「慈済」だからこそ、他の団体よりも深く仔細にできるのだと信じています。

政府は既に「在宅医療ケア統合計画」と「訪問医療サービス」を進めていますが、民間の施療に使う医療器具も益々進歩して、持ち運びに便利になっているのですが、診療所まで来られない人

は減っていません。今でも最終電車に間に合わないために治療を諦めた患者もいます。以前、金門で施療した時、特殊な病気の患者が長年外に出なかったため、口腔の状態がとても悪かった人がいました。

近年各地の病院や機関の施療団体が増えており、同じ辺境のコミュニティに二つ以上の施療団体が前後して訪ねることもあります。民衆から「もう来なくてもいい」と言われましたが、私は、施療は止めてはいけないと思います。社会の高齢化という状況の中、将来的に在宅医療と介護はもっと必要性に迫られ、施療は「違う形態」で患者に奉仕し続けるでしょう。

二十数年前に、初めて精神科病院に施療に行った時、多くの患者は外出して病院に行くことができなかったため、口腔の状態は極めて悪く、虫歯だらけでした。そこで私は、「この人生で自分の力を尽くして弱者患者を助けよう」と決めました。

●新北市平渓区での施療活動。慈済人医会の医師が山間のお年寄りを診察していた。（撮影・王賢煌）



クイック・クイズ

Q：患者に言いたいことは？
A：しっかり歯磨きしましょう。
Q：慈済は貴方にとって何ですか？
A：我が家。

慈済 人医会に関する 主要数値

世界24の国と地域からの
14,179人のメンバー

施療によって全世界で
恩恵を受けた人の累積：
延べ3,389,521人

2020年12月現在の統計

台北慈済病院特殊需要歯科に来る患者は、ほとんどが精神障害や身体障害、筋萎縮性側索硬化症や認知症の患者です。休日は施療を通して、交通の不便な独居老人や障害のある人、外国人労働者や社会福祉機構がケアしている人を支援しています。会場では医療奉仕のほか、ボランティアと一緒にテントを張り、素手で患者の汚物を取り除くこともしました。

慈済人医会に参加して二十年経ちますが、一年に少なくとも二十回、多い時には五、六十回の施療が行われるのが普通です。休日に診療所から出て、辺境に行ったり、国際災害時に海外で施療に行ったりする時は、報酬がないばかりか、自費と自分の休暇を使うのですが、喜んで参加しています。

慈済人医会は施療を続けているほか、コミュニティで健康と衛生教育の講座を催し、病気予防と正しい考え方を民衆に伝え、病気の発生率を低くしようと努めています。また、ボランティアと連携することで、患者の家庭状況をよりよく理解し、身体的にも精神的にもより全面的な支援ができるので、医療と慈善が結びついた全人的ケアを実践しています。

最も理想的な方法は、医療スタッフが患者の家や弱者団体に出向く頻度をもっと上げることだと思います。毎回、施療の時間が限られているので、全ての患者の診察を終えるとは限りませんが、外出が不便な弱者患者のことを考えることで、より深くケアすることはできると思います。

最も重要なのは「伝承」することだと思います。自分の施療経験は二十年になりますが、毎回出遭う困難も、一緒に仕事するボランティアや医療メンバーも異なります。不便な環境で患者を安心させ、治療を進め、新しい医療メンバーを受け入れ、実際に実践してもらうのは、とても大切なことです。また、その過程で、ボランティアにも患者との安全を確保して話し合ってもらいました。自分で自分の身を守ることも、とても重要なのです。

毎回、施療の機会を逃さず、患者の表情が痛みを訴えるものから笑顔に変われば、どんなに疲れていても、価値があると思うものです。

（慈済月刊六五四期より）

特別報道・慈済55

善が集まる地域拠点へ、ようこそ

口述・何瑞真（新北市板橋区慈済ボランティア）
取材＆編集・陳麗安　訳・御山凛

問：一般の人も「静思堂」に入ることができますか？



答：静思堂は「慈済人」にとっては修行をする場所ですが、一般の人からすれば、静思堂は様々な役割があると思います。例えば、学習して成長する教育の場であり、心を落ち着かせることができる精神修養の場所でもあると思います。

静思堂ではいつも精進講座が開かれており、ボランティアが一歩踏み込んで災害支援や訪問ケアなどに関する知識を得ると共に訓練をしています。もし一般の人がもっと慈済について知り、コミュニティのボランティアになりたければ、「コミュニティ・ボランティア研修クラス」に参加することができます。また必要な時には臨時の避難所になり、食事や支援を提供し、被災者を安心させると共に、前線で頑張っている救助隊員を労っています。

開設されて二十八年になる「子供成長クラス」は、今でも各地にある静思堂で開かれており、子供がより良い品格と道徳心を身につけるよう、親を支援するものです。一般の人はそこで開かれている茶道、ヨガ、太極拳、料理、絵画や書道などの講座を通じて、人文教養を身につけて生活を豊かにすることもできます。

また、環境の変化に伴い、各地にある静思堂はそれぞれの条件に沿って、長期介護やデイケアセンターを開設しているところもあります。息子や娘が仕事に出かけている間、私のようなお年寄りが静思堂に来て、他の「仲間」と一緒に運動や手芸などを楽しむところです。そこから人との触れ合いを通して互いに関心を持つことで、よりリラックスできるようになります。板橋静思堂には、「シニア

学校」があり、お年寄りたちがとても賑やかに授業を受けています。

空が明るくなると人が集まってくるリサイクルステーションから、夜間や週末に開かれる様々な講座まで、静思堂は、教育の推進、介護サービス、心のケアなど多元的な役割を融合した場所です。また政府の必要に応じた、防災教育やアート展示、または地域の活動にも、板橋静思堂は喜んで協力し、場所を提供しています。さらに忘れてはいけないのは、静思堂はコミニュティケアという重要な使命を担っているということです。慈済永続レポートでは、二〇一八年の板橋静思

静思堂の社会的影響力に関する主要数値

板橋静思堂を例にとれば、
1元の寄付金を使って、
慈済ボランティアが無償で
慈善活動を行うことで、
社会に50元のプラス効果が
生まれる。

クイック・クイズ

Q：静思堂に行って何をしているのですか？
A：あちこち見て、自分の家でするのと同じように手伝いをしています
Q：あなたにとって慈済は。
A：アットホームな存在です。



堂の様子が例に取り上げられました。コミュニティでの奉仕活動の効果を数字で表し、国際認定をもらっています。

一九九〇年代を思い返せば、当時板橋区には決まった集会場所がなく、人数が多いボランティア活動の時は、地域の学校を借りるしかありませんでした。また当時は、交通が不便で、北部を例に取れば、ボランティアは淡水、三峡、新荘更に板橋から当時の連絡所であった旧台北支部にまで出かけなくてはならず、とても時間を要しました。今は、板橋のボ

●人々は歳末祝福感謝会に参加するために、高雄静思堂を訪れていた。（撮影・鐘耀賢）

ランティアは静思堂を活動拠点とし、コミニュティケアを着実に行っています。もし近隣地区で臨時の状況が発生した場合、ボランティアは直ぐに駆けつけることができます。そして、台湾全土にある静思堂も、それぞれの特徴を活かして発展しています。例えば高雄静思堂は、環境教育施設の認証を取得し、コミュニティに環境教育と学習をする重要な場所になっています。

慈済に参加して三十年以上経ちますが、板橋慈済パークが、世界中の慈済静思堂と同じように、ボランティアがコミュニティケアを着実に行うことをサポートすると同時に、親しみやすい、良い影響を与えてくれる、学びの場になればと思っています。大衆が各地の静思堂を訪れることは大歓迎です。特に、静思堂は緑に囲まれ、板橋静思堂の場合は入り口に花壇があり、朝や夕方にはいつも近所の人が散歩したり、親が自転車に乗った子供を連れてきたりする光景を見かけます。

どのように「静思堂」を定義するか、また静思堂は一体どのような役割があるのか、皆さんが自分で訪れてみて体験すれば、一人ひとりが解釈する静思堂の使用方法が異なり、多様性のある答えが返ってくると思います。（慈済月刊六五四期より）

特別報道・慈済55

心に響いた一言

口述・李美金（慈済教師懇親会ボランティア）
インタビュー&編集・陳麗安　訳・荳荳



問：**慈済のメンバーや仏教徒でなくても、静思語教育をしてもいいのでしょうか？**

答：一部の人は、證厳法師の教えを抜粋して編集した静思語が「宣教」のために使われていると誤解していますが、実は、静思語は「心を静めてから話す言葉」であり、難しい宗教用語ではなく、逆に、生活に密着したものや智慧にあふれた言葉になっています。例えば、「話す時は優しく、態度は謙虚に親切で

あれば、人は優しい和やかさを感じることができる」や「人生で最高の成就は、失敗から立ち上がること」のように、全てが静思語なのです。

初めて静思語に出会ったのは、二十五年前に開かれた教師たちのお茶会でした。ある先生がシェアしていました。「静思語を教材として授業に使った後、生徒と保護者の双方に前向きな変化が現れました。当時、私は半信半疑でしたが、授業で試してみました。「良い言葉を使い、良いことを考え、良いことを行い、良い道を歩もう」というフレーズがあり、生徒たちにその四つのフレーズから一つを



クイック・クイズ

Q：あなたの好きな静思語は？

A：多く行えば、多く得られ、少なく行えば、多く失う。

Q：慈済基金会はあなたにとって何なのでしょうか。

A：ポジティブなエネルギーに満ちた最も居心地の良い「家」。

「静思語」に関する主要数値

1989年に
初版が発行となる
800万部以上を販売し、
既に23の言語で
出版されている

2021年4月現在の統計

選んでもらい、実行してもらいました。

翌日みんなにシェアしてもらうと、主に日常の些細なことばかりでしたが、ある生徒はこう言いました、「長い間考えたけど、良い言葉を使うとはどういうことか分からなくて、妹の髪がとてもきれいだったので、妹に『今日の髪はとても綺麗だね！』と言いました」。静思語を通して、子どもたちは他人の良さを見つけることを学んだのです。それで私は静思語をクラスに取り入れることに決め、子どもたちがその中で、もっと成長して

●斗六市溝壩小学校付属幼稚園での静思語道徳教育活動。（撮影・張国徽）

くれることを期待しました。

「静思語の意味」と「静思語授業」を保護者に理解してもらうために、始業式にアンケートを用意しました。宗教が違うために、最初は半信半疑だった親が数人いましたが、次第にそれらの良い言葉が生活に密着したものであり、子どもたちに前向きな影響を与えることができると分かってからは、保護者は私と一緒に子どもたちの長所を見つけようとするようになりました。

静思語は、環境保全、親孝行、礼節など多様な内容をカバーしています。それは人々の善念を啓発しており、学生と静思語を分かち合うことで、ポジティブな思考と行為を育むことができるよう、導きたいと思っています。例えば、「行動に不自由のない体を使って、悦楽したり、物欲に溺れたりしてはいけない」を引き合いに出しました。このフレーズを通して、子どもたちはピアノを一時間練習したり、三十分間運動したり、家事を手伝ったり、と無意識に時間を有意義なことに使うようになりました。

私も静思語に出会ってから、自分で気がつかなかった悪習を変えることができました。昔は完璧主義で、息子が間違ったことをすると直ぐに叱りました。私は息子にとって「タイガーマザー」だったのです。夫からも「子どもは悪くないのにどうしてそんな大声で叱るのだ?」と聞かれたことがありました。同じようなことが続き、私もいつも不機嫌で、家庭の雰囲気は悪くなっていました。

「気性や口が悪ければ、どんなに善良でも、善人とは言えない」。この静思語によって、私は考えさせられ、態度を変えるようになりました。私はもはや子どもに良い成績を求めたりせず、苦情よりも賞賛の言葉を多くし、子どもたちが健康でいてくれれば十分だと思うようになりました。

子どもたちも私の変化に気づき、家庭内の雰囲気もだんだん良くなっていきました。また、静思語に出会ってから、本当に得をしたのは他ならぬ自分であり、それを消化して初めて、子どもや生徒たちと一緒に成長していくことができたのです。

静思語は宗教を伝えているのではなく、多くの言葉は現実の人生における啓発なのです。一般の人に疑問があれば、ボランティアが喜んで説明するでしょう。誰もが静思語の美しさを理解できることを願っています。

（慈済月刊六五四期より）



（撮影・楊秀娩）

国際慈善・日本

日本における竹筒歳月

文・許麗香（慈済日本支部執行長）
訳・葉美娥

十年前の三一一東日本大震災の時、世界三十九の国と地域の慈済人が、愛の義援金を募り、震災後の復興再建を支援しました。被災者は現在ボランティアとなって、一致協力すればいかなる困難にも打ち勝つことができるという精神を見習って、五百個の竹筒貯金箱を手作りし、五百人の応募者を募りました。これで千手観音のように皆で人助けができるのです。

日本では、毎年の年末にその年の世相を表す漢字一文字が、京都の清水寺で発表されるのが恒例となっています。二〇二〇年は「密」が選ばれました。コロナ禍を反映して、生活様式が変わったことを表したものです。政府はコロナ禍への対応として、「密閉・密集・密接」という「三密」の回避を呼びかけていました。そして「三密」が年度の「流行語大賞」に輝きました。

昨年の四月と今年の一月、日本政府は二度「緊急事態宣言」を発令しました。桜が満開の三月に宣言を解除したところ、感染拡大の第四波に突入したため、四月下旬に結局三回目の「緊急事態宣言」を発令しました。

日本の慈済人は、政府の政策とコロナ禍の変化に合わせながら、訪問ケア活動を必要に応じて続けました。では、元来行っていた路上生活者への炊き出しはどうすべきでしょうか。最後の手段として、十二年間続けて来た東京代々木公園脇で配付していたカレーライスや五目丼を、おにぎりとフルーツあるいはシンプル生活パックに変えることにしました。そうすれば三密を回避することができ、現場で配付するボランティアも最小限の人数にすることができるのです。

大阪西成区の路上生活者には、お米とおにぎりの具を提供し、現地の行政スタッフの協力でおにぎりにしてから配付しています。慈悲と智慧でもって、如何にボランティアの健康を護りながら、路上生活者にお腹を満たすかを考えました。

コロナ禍の状態で、助念の依頼が入ると心の中に葛藤が起きます。というのは、参加するボランティアが少ないと依頼した家族が失望する一方、厳しい状況の中でボランティアの感染リスクが高まるからです。しかし、慈済人が助念に現れると、家族らは感謝と感動の表情で迎えるので、ボランティアは「来て良かった」と感じます。

オンラインで鳴り響いた着信音

慈済日本支部の中国語教室の子供たちは、コロナ禍で授業の回数が減少しました。ある日、親御さんから「竹筒はいつ持っていけばいいのでしょうか？」と聞かれました。実は子供たちは毎年、十二月の冬至の頃に竹筒をもらい、翌年の年始に行われる感謝祈福会で、竹筒に貯めたお金を慈済の功徳海に投入していたのです。

東北のボランティアは、三一一東日本大震災十年目を機に、当時の全世界の慈済人による愛の支援に報いるために、五百本の竹筒貯金箱を企画しました。五百人の力で千手観音になり、愛をこの



世にまくことを意味しています。彼らは五百個の、回収に出して再利用できる小さい空き缶を用意し、自分たちで設計した図柄で包装すると、證厳法師の教えを竹筒に書いた静思語で表しました。遠く離れている東北地方のボランティアは、東京の慈済大家族と一緒に、竹筒の縁でもって手を携えて前進し、愛に満ち

●慈済日本支部は毎月2回、代々木公園の側で路上生活者に主に菜食カレーライスや五目丼の炊き出しを行っていたが、コロナ禍を考慮し、昨年7月からおにぎり、フルーツ、飲み物に切り替えた。

（撮影・呉慈涓）

た心で苦難の人々を慰めていきます。

感染が拡大していた大阪で、路上生活者の担当をしていたボランティアは、電話でとても感動した話をしてくれました。それは、路上生活者保護センターの責任者が会員になって、毎月寄付をしていることでした。以前、私たちが炊き出しをする会場で、竹筒を置くことを許可してくれただけでなく、自主的にポスターを設計して、一日一善という愛の奉仕を呼びかけてくれました。また、東京の代々木公園で配付活動をする時も、ボランティアは竹筒精神の宣伝を忘れてはいません。路上生活者がボロボロの衣服から硬貨を取り出す時は、いつもボランティアに感動を与えます。

以前は「竹筒の里帰り」という活動をいつも大きなイベントに合わせて行っていましたが、今年はコロナ禍の影響で、感謝祈福会が一月三十一日に東京、大阪、山梨、東北の四つの地域をオンラインで繋げて行われました。画面で皆が竹筒を振って、互いに励まし合っているのを見ると、感動と共に心が締め付けられました。いつになったら心配なく、互いに抱き合って思いやることができるのでしょう。

二〇二〇年初頭に始まり、今は既に二〇二一年も半年が過ぎてしまいましたが、里帰りの道は依然として遠いのです。

以前は毎年、少なくとも四回以上、「心の故郷」に帰って、證厳法師にお会いする機会があり、当たり前のことだと思っていましたが、今は先のことが全く見通せません。日本の慈済家族は、オンラインで頻繁に祈りや菜食奨励の会、勉強会を催して、面と向かって会えない寂しさを解消しています。「災い転じて福となす」と言われるように、オンラインで、家にいながら證厳法師に追随し、仏法を聞いて精進して、各地の道場から喜びや悲しみを分かち合うことに喜びを感じています。中でも證厳法師が心から絞り出した、諄々としたその教えは、海外にいる慈済人の心を牽引しています。

強震、津波、疫病

三月二十七日、證厳法師と繋がって温かい雰囲気の中で行われたオンライン座談会では、十年前の東日本大震災を振り返りました。東北地方の住民たちは当時の慈済の愛が忘れられず、海を隔てて證厳法師に感謝と感動の気持ちを伝えました。

東北地方初めての慈済人である伊東信一さんは、この十年間絶えずボランティアと連絡を取り合い、東北地方での「新芽助学金」活動に協力しています。彼は二回大病を患い、ボランティア活動にあまり参加できなかったことをとても残念がっていました。岩鼻清一さん夫婦は、



●10年前に慈済人の手から授かった義援金の封筒を掲げ、当時の東日本大震災の被災者は、竹筒貯金箱を受け取って、一日一善の善意に呼応している。（撮影・張君）

当時の義援金による支援の恩返しとしてボランティアになり、新芽助学金プロジェクトの立ち上げを手伝いました。張君（チャン・ジュン）さんは、自分の娘があの複合式災害で亡くなり、慈済の見舞金配付会場に行った縁で、證厳法師の静思語に感化され、また東京の慈済大家族の寄り添いで、東北地方で初めての慈済委員になりました。彼女は涙を流しながら證厳法師が慈済を創設してくれたことに感謝し、東北地方で一心に慈済の志

業を耕し、もっと多くの人を慈済に迎え入れることを発願しました。

亀山千代志さんは書道と絵画が非常に上手で、張さんと一緒に現地でボランティアを募り、石巻市と東松島市で一緒に慈済志業を推進しています。東アフリカのサイクロン・イダイ風災で街頭募金活動をしたほか、東日本大震災十周年でも、五百本の竹筒貯金を呼びかけました。

間もなく三十周年を迎える日本支部は、第三の十年目の最初に三一一東日本大地震のような世紀の大災害に遭遇しましたが、幸いに證厳法師は震災直後に私たちの心を落ち着かせ、絶えず寄り添って、災害支援の方向を指示してくれました。また、世界三十九の国と地域からの愛の支援で、私たちは苦難にあった人たちを慰める力を付けることができました。證厳法師は日本の慈済人に、あの時の感動をしっかりと心に留めること、そして災害を減らす妙薬は愛であり、募金を通して愛を語れば、志のある人を見つけることができ、愛を世に広めることができる、と切々として言い聞かせてくれました。私たちは縁を把握して、日本全土に撒いた情と愛と、その縁がつなぐ貴いものを取り戻し、苦難の人たちを慰め、法音を流す力になることを願っています。

日本慈済人の心を千里の彼方に伝える

日本支部設立から八年目の一九九八年に、私は日本に転勤した夫と共に、再び日本に戻りました。当時の日本支部は、ベテランボランティアの宋篤志（ソン・ドゥージー）さんが提供してくれたマンションに設けられており、小さなスペースに十人余りの委員がいて、人数は少なくても心が温まりました。当時、慈済委員になったばかりの私は「仏の心、師の志」を胸に、遠大な抱負を持って、如何にして證厳法師の慈悲を広め、より多くの人に慈済を認識してもらうかを考えていました。

五、六年後には夫の転勤で日本を離れるものと思っていましたが、思いも寄らず、縁によって日本に残って日本支部と共に成長することができました。一路、数々の喜びと悲しみ、涙がありました。「花が散るのは無情ではなく、春泥となって次の花を咲かせる」と言われるように、二十数年が経って、忘れようとしているのか、または智慧の昇華なのか、過ぎた出来事の哀傷は忘れてしまい、人や自分が悔しい思いをした時は涙を流し、楽しい日々は笑い声に溢れていたことだけは覚えています。

人々と共に二十三年間歩んできました

が、日本支部は、「三十にして立つ」年になり、湧き上がる気持ちと共に、これまでのように日々「慈済の志業」に没頭しています。当時、證厳法師の「天下の買い物かごを持つ」決意に感動し、法師に追随して群衆の中に分け入ろうと決心しました。最初は単に利他の善行をすれば十分だと思っていましたが、広大な仏法の中に入ってみると、経を唱えることから無量義に足を踏み入れて法華を知るようになりました。苦集滅道（苦諦、集諦、滅諦、道諦）を理解し、修行は「六度万行」（布施、持戒、忍辱、精進、禅定、般若）しなければならず、経蔵を深く理解して初めて海のような智慧が溢れ、忍耐があってこそ、菩提大道を前進できるのだと知りました。

人間菩薩は困難に直面しても前に進まなければなりません。慈済が歩んできた五十五年間、證厳法師は、分秒を大切にして、私たちが絶えず初心に戻り、愛は実践しなければならないと励ましてくれています。自分の愛は完全無欠だろうか、教えを実践しているだろうかと、夜中に目が醒めても常に反省しています。心の故郷から遠く離れた日本で、皆が心を一つに、愛をもって災害を防ぎ、誰もが生命の価値を上げ、慧命が成長し、證厳法師の心に添うように願っています。

（慈済月刊六五五期より）

今世も来世もジンバブエを守る

文・張麗雲（台中慈済ボランティア）　訳・田中亜依

「火葬した後の遺灰はジンバブエ各地に撒いてくれないか。来世もこの困難に満ちた国を助けたいんだ……」ジンバブエの慈済ボランティア・朱金財（ジュー・ジンツァイ）さんは、コロナウィルスに感染し、病が重症化した夜、妻にこう言った。

二〇二〇年三月、国内のコロナ禍がまだ深刻でなかった時、ジンバブエ政府は全国のロックダウンを宣言した。公共交通機関は全面運休し、各地に検問所が設けられ、警察が随時パトロールを行い、市民が一歩でも外出すれば取り締まりを受け、村や都市を越えた移動はできなかった。

朱さんは一歩も外に出られなかったが、飢餓に直面している貧困家庭のことが頭から離れられなかった。彼らは十分な食糧の蓄えがなく、死を待つしかなかったのだ。ロックダウン三日目、通関業者がコンテナ輸送の資料を届けに来た際、通関業者が通行証を持っていることに気づき、彼はその方法に従おうと申請機関の責任者に掛け合った。「慈済がジンバブエで慈善支援してきたことが功を奏して、現地官僚も既に慈済の行動に賛同していたため、私と五人のボランティアは前後して通行証を取得することができました」。

通行証を取得すると、朱さんは直ちに車二台分の物資をボランティアの家に届けた。コロナ禍の中で、物資の内容が分かってしまうと、途中で強奪される恐れがあったため、ボランティアは手押し車を使わず、布で物資をくるみ、頭の上に載せて一戸ずつ配付した。苦しんでいる人々が必要とする物は多くはなかったが、米、食用油、砂糖、塩などの物資は命を救う解毒剤のようだった。

ロックダウンが何度も延長され、五、六カ月続いた。人々は外に出て仕事に行くことも出来ず、あらゆる公共施設は休みになり、政府機関も十分の一のスタッフが勤務するのみだった。幸運なことに朱さんと五人のボランティアは通行証を持っていたため、困難を乗り越えて、物

資の配付を続けることができ、地元ボランティアは幾つかの拠点で炊き出しを行った。クリスマス直前に十一の町で十四回配付し、全部で九千世帯の貧困者がクリスマスを過ごせるようにした。配付する時は必ず、「他人を助けると同時に、自分の安全にも気を付けて感染しないよう気をつけよう」と声をかけてボランティアたちは励まし合った。

「思ってもいませんでしたが、今年一月初め、私は感染してしまったのです」。と朱さんは語った。初めは少し咳が出る程度で、主な症状は発熱だったが、自分が感染したとは思っていなかった。十数日が過ぎてから、何かおかしいと思い始め、体調が益々悪くなったので、妻と子



●ジンバブエのボランティアがマシンゴ省グトゥ地区で貧しい家庭に米や毛布を配付した。朱金財（左）は頭上に米を乗せて、人々と交流した。（撮影・フレンギシレ・ジヤネ）

に促されて病院で検査を受けた。陽性が判明した時には病状は既にかなり重く、人工呼吸器をつけて治療を行わなければならなかった。

二日が経っても回復の兆しは見られず、三日目には呼吸困難に陥り、その夜を越せないのではないかとさえ思った。意識が朦朧とする中、遺灰は今まで訪れたジンバブエ各地に撒いてほしいと妻に託した。「そうすればジンバブエに戻って来るのを忘れることはない。ジンバブエは苦難が多過ぎる。来世もこの苦難の国を助けたいんだ」。

妻はとても心配したが、朱さんがジンバブエに移民して二十数年間、最も気にかけていたのはジンバブエ人の苦難であることを知っていたため、辛くても、彼に発破をかけるしかなかった。「あなたの言う通りにするわ。でも考えたことはあるの？もし今この世を去ってしまったら、こんなに多くの苦しんでいる人たちはどうすればいいの？来世でもじゃなくて、今もっと頑張って良くなって、コロナで苦しんでいる人たちを今すぐ救いに行かなきゃ」。

彼は意識が朦朧としていたが、「ジンバブエ人」と「苦しむ」と聞いて、深く息を吸うと、突然意識がはっきりし、「そうだな、もし私が今苦しんでいるジンバブエ人たちを見放したら、彼らは私が戻って来るのをいつまで待てばいいのか」。一言で夢から覚め、彼は必ず生き続けるのだと自分に言い聞かせた。

ボランティアたちは皆、敬愛する「ブラザー・ジュー」が感染したことを知り、見舞に駆け付けようとしたが、朱さんは「どうか諦めず頑張って下さい。私も直ぐに帰って来て皆さんと一緒に頑張りますから！」と家族を通じてボランティアたちに伝えてもらった。ボランティアたちは名残惜しく思い、その場で跪いて彼に祈りを捧げた。

二週間後、彼の病状は好転した。今回、生死をさまよった後、彼に生きる力が出て来たのは、苦難に喘ぐジンバブエの人々のためだった。

彼はボランティアたちに回復後の心境を話したが、実は自分に言い聞かせるものだった。「来世でもジンバブエで暮らすチャンスは大いにありますが、衆生を助けて菩薩道を歩みたいのであれば、慈済世界しかありません。ですからジンバブエの慈済は継承されなければなりません。そうすれば、私たちの世代が戻って来る時には、至るところに慈済があるのです！」（慈済月刊六五五期より）

義足が支えた人生　八百屋家族の幸せ

文、撮影　アナンダ・ヤヒヤ（インドネシア「慈済世界」の記者）
訳・陳龍仔（チェン・ロンヅァイ）（慈済インドネシア支部翻訳グループ）、本誦



●アントンさんは、義足を作る支援をしてくれた慈済に感謝している。そのおかげで彼の歩行能力は回復した。

深夜に野菜を仕入れ、早朝から店を出すアントンさんは、そういう生活を苦労と思わない。だが、かつて彼は、足を失った事実を受け入れることができず、家族を幸せにする自信がなくなって、妻や子供を何度も実家に帰らせようとしたことがあった。

アントンさんは親しみを込めた笑顔で、買い物に来た客をもてなす。一見すると普通の人と変わらず、誰も彼のズボンの下で彼の体を支えているのが義足だとは気がつかない。

インドネシア西ジャワ州チカランのカラン・ラハユ村に住むアントンさんは、毎日深夜十一時から翌朝一時まで、チビトゥンの卸売市場で野菜を仕入れ、朝の六時から八時まで、昔ながらの市場で空心菜やほうれん草、唐辛子、エシャロット、ペタイ豆、ユウガオの実などの新鮮な野菜を売っている。

三十六歳のアントンさんは、慈済と縁ができた後、医療保険以外の医療費や交通費、義足などの助成金を受けた。ボランティアの付添いと励ましは彼を元気づけ、小家族に元来の温かさを取り戻すことができた。障害のある人は必ずしも他の人の重荷になる必要はなく、彼は行動でもって、自立できることを証明した。

レバランの前夜　事故に遭う

二〇一二年の八月十八日、レバラン（断食明け大祭）の前夜は、アントンさんにとって生涯忘れられない日である。「その時は母の使いで、レバランのための食材を買いに行き、道路を横断していました。すると猛スピードで走ってきたミニバスに跳ね飛ばされ、地面に落ちた時、左足を別のオートバイに轢かれたのです」。

アントンさんは命は取り留めたが、左脚の怪我は非常に重く、レバランの休暇中で一部の医療スタッフが帰省していたため、彼は十分な治療を受けることができなかった。「家族は私を家に連れて帰り、民間療法の治療を受けさせようとしました。しかし、ギプスを外してみると、思いも寄らず、脚が既に腐爛していました」と、当時医者に診てもらう苦労を思い出して嘆いた。そして、残酷にもその事故で彼の行動力は奪われてしまった。

八カ月経っても彼は回復せず、治療を続ける能力もなかったため、炎症を抑えるための抗生物質を服用するしかなかった。二〇一四年になってやっと、彼は知人を通じて慈済に支援を求めた。

ボランティアが訪問して査定した後、彼に医療援助を行うことを決めた。そしてジャカルタにあるチプト・マングンクスモ病院に同行した。幸いに、脚の炎症



は体の他の部分には影響を及ぼしていなかった。その後の九カ月間に、彼は四回手術を受けた。完全に回復したわけではないが、びっこを引きながらも歩けるようになった。自立できるようになった彼は市場に戻って野菜を売り、妻となるナピアさんと出会うことになった。

妻の寄り添いで自信を取り戻す

一年後の二〇一五年、アントンさんの左脚に小さな傷ができ、それが次第に拡がった。

●アントンさんは、再び市場に戻って野菜を売って家族を養う、そんな平凡な生活を大切にしている。



やっと新しいスタートを切った彼は再び打ちのめされた。しばらく経てば治るだろうと簡単に自分で治療して済まそうとしたが、数週間後、思いもよらず左脚の後ろにもっと大きな傷が現れ、急速に悪化した。

傷口が酷く感染し、アントンさんは頻繁に高熱を出すようになり、再び慈済に医療援助を求めた。今回は比較的近くに住むボランティアのチカランさんが同行した。「初めてアントンさんに会ったのですが、何度も電話を受け取り、私は

●以前、悲しみに覆われていたアントンさんの顔は今、明るい笑顔に変わった。彼は家族を幸せにし、年老いた母親に孝行することだけを考えている。

きっととても苦しく、どうしても助けを必要としているのだと思いました。そこでその日の会議を全部キャンセルして、直ぐに見舞いに行きました」と慈済ボランティアの黄国鴻（ホワン・グォホン）さんがその時の様子を語った。

彼がアントンさんの家に着いた時、傷ついて布で包まれた足が目に入った。足の傷口からは膿が流れ、悪臭を放ち、彼は痛みに苦しんでいた。当時のインドネシアには健康保険制度はあったが、全額を負担するわけではなく、彼は医療費や交通費を負担できないため、大病院に行くことができず、無料の保健所で診てもらうしかなかった。医師は脚を切断することで命を繋げることを提案したが、その後は義足に頼る必要があり、義足を作るには三千万ルピア（約二十万円）の費用がかかる、と説明した。それを聞いた瞬間、彼は自分の無力を悲しく思い、自殺したいとまで思い詰めた。

「自分には治療する能力さえないのに、どうやって妻や子供たちを幸せにできるでしょう。その時、妻に実家に帰るよう言いました」とアントンさんが言った。しかし、ナビヤさんは夫から離れたくなかった。「あなたと結婚すると決めた時、私はあなたと一緒に苦楽共にする覚悟ができていました。あなたが病に倒れた時にどうして離れることができるでしょう？」。

ナビヤさんは悲しみと共に、ボラン

ティアにこう言った、「切断手術の後、目を覚ました彼が最初に私に言った言葉は、『僕は君を幸せにすることはできない。だから、やはり子供を連れて実家に帰った方がいい』でした。それを聞いて本当に悲しく思いました」。

慈済は、アントンさんに義足を作る資金を支援した。ナビヤさんも夫と共に歩む決心を新たにし、人生で最も困難な時期を共に過ごした。他人の目を気にせず、彼女はいつもオートバイで彼を載せて病院に通った。「何も恥ずかしいことではありません。夫は行動が不自由ですから、私が彼を助けるのは当然の義務です」。妻の愛とボランティアの励ましで、アントンさんは徐々に元気を取り戻し、一家を支えるために、以前の生活に戻ることができると自分を信じるようになった。

賢く選択し、自分で壁を作らない

義足を使って動くのはそれほど簡単ではないが、通常の生活に戻るのには十分である。「私はバイクでチビトンの市場に行って野菜を仕入れたり、自分で屋台の整理をしています。いつまでも他人に迷惑をかけたくありません」と彼は嬉しそうに言った。それまで悲しみに覆われていた彼の顔は明るい笑顔に変わり、今では毎朝、笑顔を輝かせて屋台に来てくれるお客さんを迎えている。

彼はボランティアに、このことから学んだのは、感謝の気持ちと賢く選択すること、自分にできる最善を尽くすことだ、と語った。「家族を幸せにし、年老いた母親に孝行することが、今の私の生き甲斐です」。

「幸いにも、黄さんが私を励まし続け、治療まで付き添ってくれました。また、慈済が義足を作る支援をしてくれたことで、私は以前のように行動することができるようになりました。とても感謝しています」とアントンさんは、今まで助けてくれたボランティアたちに感謝した。

アントンさんの商売は軌道に乗り、家庭の経済状況も改善した。少しずつ家を修繕するお金もでき、更に分割払いでオートバイを購入した。彼は善行することも忘れてはいない。収入の一部を慈済に寄付して他の貧しい人々を助け、善の循環を作り出している。

アントンさんは普段から他の心身障害者に、ネガティブなことを考えないよう励ましている。よりポジティブな活動をしたり、簡単な仕事を試してみることで、忙しくすれば、心にある障壁を取り除くことができるだけでなく、収入を得ることもできる。彼は、一生懸命働く限り、神様は努力する者を見放すことはないと信じている。（慈済月刊六四七期より）



幸福感

進んで責任を担うことは自分を肯定することです。
奉仕する機会があることに感謝すれば、
幸福を感じます。

◎文・釋徳仉／訳・済運

防疫は一人ひとりの責任

五月二十五日、上人は、オンラインで防疫総指揮センターと各慈済病院代表者の報告を聞いた後、こう開示しました。

「気はとても重いのですが、悲観的にならず、皆で厳格に感染防止に努め、世の平安を願いましょう。各病院の医療スタッフは大変な苦労をして、どんなに疲れていても背筋を伸ばして耐え続けなければならず、見ていてとても忍びなく思います。しかし、世界中がコロナ禍の中で、恐れおののく心を敬虔な心に変え、敬虔に生命と健康、愛を守らなければいけません。これは医療スタッフの職責に限ったことではなく、社会の一人ひとりが生命を守るという責任を果たさなければならないのです」。

黄思賢（ホワン・スーシエン）師兄（スーシオン）は中国からオンラインで上人に、今回の「思いやりの旅」と山東省慶雲慈済病院の除幕式典について詳細に報告しました。最近、雲南省と青海省で強い地震が発生しましたが、家に戻れない民衆は防寒物資が不足しているため、四川省の慈済ボランティアは被災地に届ける一回目の物資の準備を整えました。

「今、私が一番に願っていることは、現地の慈済ボランティアが、私の心の重荷を分担して、一人ひとりが善行することで、世が平安になることです。私は、幸福は感謝の気持ちを持っている人に与えられる、と言ったことがあります。誰もが見返りを求めず、奉仕するチャンスを掴み取って、自分が善行して福をもたらすことができることに感謝すれば、自然と心に感じるのは幸福です。従って、幸



福は感謝の心を持つ人に与えられ、見返りを求めない奉仕をする人が最も幸福なのです。智慧は学ぶことを厭わない人に与えられます。私たちは皆、菩薩になることを学んでいますが、菩薩道を実践してこそ、菩薩道の素晴らしさを身につけ、心は堅実なものとなるのです」。

「一人ひとりが菩薩の両目と両手になり、菩薩道を実践して、因縁を逃さず菩薩になることに期待を寄せています。使命は責任を担う意志のある人に与えられます。それを担おうとする心が即ち、自分を肯定していることであり、私たち皆が人々から認められることにもなります。チャンスは心の準備ができた人に与えられます。それというのも、菩薩として発心し、使命感を持っていれば、どこで必要とされても、直ちに救済に行く用意ができているからです」。

●世界のコロナ禍が頭から離れない上人は、世界地図を見ながら、国と国の間で慈済の防疫物資が調達される状況に関心を寄せていた。（5月20日）

今生が終わっても、模範の行いは永遠に残る

精舎の常住衆たちが「大師兄」と呼ぶ、徳慈（ドーツー）師父（スーフ）の訃報が入りました。夜の八時五十五分でした。上人は病床を見舞い、徳慈師父に最後の開示をしました。

「紹惟（シャオウェイ）！凡夫の情は有限ですが、菩薩の悟りは永遠です。数日前、あなたに『千般の情、万般の愛』という話をしました。解脱して自在になる時です。あなたなら分かっていると思います。私たちはとても幸福ですね。お互いに縁があって一緒に慈済世界を創設しました。足ることを知り、福を知って、感謝する心を

持っています。慈済の菩薩道を忘れてはいけません。菩薩の世界はとても心安らかで、美しい境地です。私が講釈した《法華経》に『六瑞相』がありましたね。それはとても美しい境地で、あなたの心や意識は飄然として自在ですから、六瑞相の境地にあると信じています。この道を忘れてはいけません。間違った方向に向かったり、道から逸れたりせず、この美しい境地に戻ってくるのです。六瑞が現れれば、軽やかで自在になるのですよ。そしてそこに行き着いたら、直ぐに戻って来るのですよ」。

「あなたを祝福しています！あなたはとても良い運命にあり、私も良い運命にあります。私たちは老いても孤独ではなく、病気に苛まれても皆が寄り添ってくれています。今、数多くの師兄（スーシオン）、師弟（スーディ）が側にいます。喜びと共に自在で軽やかに、あらゆる情や諸々の愛を放下するのです。菩薩の慧命を守って、行き着いたら直ぐに戻って来て道を切り開く続きをするのです。将来、私もあなたが切り開いた道を歩み、前後して切り開いて行きます。今

まではあなたたちのために、私が道を切り開いてきました。今はあなたが先に行きました。この道は引き続き平坦なものにしなければなりません。私たちがこちらで広い道を切り開き、あなたがあちらでそれを歩き易いものにするのです。軽やかで自在になり、飄然と解脱し、再び戻って来る時に笑顔で皆に喜びと幸福をもたらしてくれることを願っています！」

困難を克服しながら苦労して切り開いて来た道で、徳慈師父は上人に追随し、六〇年近く修行の歳月を歩んでこられました。その師弟の深い縁は来世に引き継がれ、菩薩道で続いていくでしょう。徳慈師父は徳と慈でもって人に接し、至る所で良縁を結んで来られました。その人生は尽きても、模範は永遠に残ります。

午後九時、夜の太鼓が鳴り、常住衆たちは交代で念仏を始めました。また、翌日の早朝四時には暁の鐘と共に、徳慈師父のご遺体が慈済大学の大捨堂に移され、医学の英才を育てる遺体先生となります。

（慈済月刊六五六期より）

八月の出来事

訳・済運

08・02	慈済科技大学はマレーシアのエイムスト（ＡＩＭＳＴ）大学とオンライン会議を開き、学術交流に関する覚書を交わした。主な内容は教師や学生の学術文化交流、学術討論会の催し、交換留学生プロジェクト、関連学術データおよび発行書籍の交換などである。
08・03	◎慈済基金会は「コロナ禍貧困救済プロジェクト」を始動した。コロナ禍で生計に影響が出た個人や家庭へのケアとして、生活費や就学費を補助し、困窮している家庭の子供が9月から安心して就学できるようにするものである。本日より慈済のホームページで申請を受け付けている。 ◎ドイツ西部は7月中旬、連日の豪雨に見舞われ、重大な水害が発生した。ドイツのハンブルグ、ミュンヘン、フランクフルト各都市及びオーストリアの慈済ボランティアは2日、ケルンで落ち合い、3日から三日間の災害視察でヴァイラースヴィストやブリースハイムなどを訪れた。また、13日からはバート・ミュンスターアイフェルで被災者と救助人員のために炊き出しを行う。
08・06	◎慈済は東アフリカのウガンダで初めて慈善配付活動を行った。3日と8日にマレーシア実業家の蕭清祥氏が会社の従業員と共に、中部のカユンガ地方で百世帯の貧困家庭にトウモロコシ粉を配付した。そのほか、7日に大愛菜園プロジェクトを始動し、豆の種を2世帯に提供した。将来、収穫したものは村の人々に配られる。 慈済基金会はマレーシアの新型コロナ感染症予防活動に対する支援で、百台の酸素濃縮機をマレーシア支部とケダ支部に寄贈し、そこから

	クリム市、ペラ州、ケランタン州、タイピン市等の医療機関に貸し出す。第1回分が本日、ペナンに到着した。このほか、現地の医師たちが更に百台の酸素濃縮機を募集し、慈済に運用の全権を託した。
08・07	花蓮慈済病院の心蓮病棟（緩和ケア病棟）は開設25周年を迎えた。本日、花蓮県衛生局と合同で、「高齢者及びコロナ禍における緩和ケアに関する国際オンライン討論会」が開かれた。台湾、オーストラリア、シンガポールの学術及び医療機関から約1万5千人が参加し、オンラインで緩和ケアの経験と成果を分かち合った。
08・08	慈済基金会2021年七月（旧暦）吉祥月シリーズ活動が始まった。新型コロナ感染症の予防期間と相まって、政府の防疫措置を遵守しながら、コミュニティーで小規模の活動を行うほか、人々にオンラインで《地蔵経》の朗唱や祈福会、勉強会などに参加し、「慈済人の夏安居計画」と連携してクラウドで精進することを呼びかけた。

08・11	嘉義大林慈済病院は開業21周年を迎え、オンラインで祝賀感謝会を開いた。賴寧生院長が院内各科とのオンライン会議を通じて、医療スタッフと職員のコロナ禍での奉仕に感謝すると共に、記念バッジをシニア職員たちに贈った。
08・12	慈済科技大学と衛生福利部玉里病院は共同で人材育成に関する産学合作の意向表明書にサインした。玉里病院が五専部（注1）看護科に50人の公費学生枠を設け、先住民族籍を持つ学生や新住民（注2）の子女を募集した。就学期間中は全ての学費が免除されるほか、小遣い銭が支給され、卒業後は玉里病院に勤務することができるようになる。 （注1）中卒後の5年制専門課程。（注2）台湾人と結婚して台湾に移り住んだ外国人。
08・14	花蓮慈済病院は開業35周年を迎えた。オンラインで祝賀会を催すと共に、建設当時とその後の歩みを回顧した。また、静思精舎で證厳法師が30年以上勤めた職員たちに感謝した。

08・15	慈済アメリカ総支部人文志業発展室は2017年より、7本の仏教シリーズ映画「菩提の路――慈悲の実践（Compassion In Action：On the Buddha's Path）」を制作し、全部が「2021年国際仏教映画祭（IBFF）」にノミネートされ、6月21日から本日まで仏教のトライシクル・メディアプラットフォームで放映された。
08・16	14日、ハイチ・ポルトープランス西部でマグニチュード7・2の直下型地震が発生し、少なくとも死者2千人、負傷者1万人超、被害が出た家屋は一万戸以上にのぼり、大勢の民衆が路頭で野宿した。慈済基金会はケア活動を展開し、16日からハイチとアメリカ等の慈済ボランティアがオンライン会議で支援計画を話し合った。慈済アメリカ総支部に災害指揮本部を設置し、重被災地であるレ・カイとジェレミー両市に重点を置いて、食糧や生活物資、家庭医療パックなどの緊急物資を提供することにした。ハイチボランティアが18日に台湾駐ハイチ大使館から要請があった5百枚のエコ毛布をハイチ当局の災害支援用に提供し、21日と22日にレ・カイ市で視察を行うと同時に、食糧配付と炊き出しを行う会場を下見した。
08・19	フィージー共和国ではコロナ禍が激しさを増すと共に、農業の不作で困窮家庭は生計のめどが立たなくなっている。慈済基金会は聖ヴィンセンシオ修道女会の要請を受けて、本日4つの村で860世帯に食糧を配付した。今回は慈済が当国で行った初めての慈善支援である。
08・28	慈済基金会は第2回「自分の人生」と題した大学・専科青年研修会を主催した。デザイン思考（Design Thinking）を取り入れ、卒業を目前にした高校3年生と大学・専科・大学院生を対象に、活動を通して自分を観察し、人生計画を立て、ひいては社会参与することを啓発し、優れた価値を生み出すための講座が準備されている。今回はコロナ禍の影響で、28日と29日にオンライン形式で行われる。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL:1-718-8880866

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈濟

２０２１年９月１６日発行・２９７号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@daaitv.com

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

静思堂がワクチン接種拠点に変身



年配者たちは静思堂を出て、表に慈済ボランティアが飾った顔出しパネルで、記念写真を撮りながら、「ワクチンを打ちました！」と宣言した。政府の計画に呼応して、新北市蘆洲静思堂に接種会場が開設された。ワクチン接種によって感染予防が高まることを喜ぶ人々は、更に健康を守りたいと菜食することを選ぶ。（撮影・蕭耀華　新北市蘆洲区　2021年7月4日）

慈済日本サイト　慈済ものがたり